

# 令和2年産水稻の病害虫対策について

## 1 令和元年度病害虫の発生状況について

- ・ジャンボタニシによる食害が、6月下旬田植の稚苗で目立った。
- ・トビイロウンカは、早くから飛来し、8月21日と9月6日に病害虫発生予察注意報、9月24日に警報が発表された。登熟期には、ウンカによる坪枯れが見られるほ場が散見された。
- ・穂首いもちや籾枯細菌病、稲こうじ病などの発生が、出穂期が曇雨天となった品種で見られた。
- ・紋枯病により、枯れ上がった株が見られるほ場が散見された。9月9日に多発していると植物防疫情報が発表された。

## 2 病害虫予防対策

- ・生育前半は、移植栽培では苗箱施用剤で病害虫の防除を行う。
- ・生育後半は、出穂期前後の基幹防除と必要により随時防除を行う。

### 1) 紋枯病

#### <生 態>

- ・発生源は、前年の病斑上に形成された菌核である。菌核は数年土中に残り、発生が多い翌年には多発しやすい。
- ・分けつ最盛期以降、高温多湿時に多発、特に出穂後の高温多湿で多発する。
- ・上位第3葉以上に病勢が進むと被害が大きくなり、激発すると株全体が枯死する。



紋枯病の菌核

#### <防除対策>

- ・窒素質肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。
- ・例年多発するほ場では、苗箱施用剤（スクラム箱粒剤など）で予防する。
- ・8月上旬頃に株元に発生が見られる場合は、粉・液剤は出穂15日前頃、粒剤は出穂10～30日前頃に散布する。

### 2) 稲こうじ病

#### <生 態>

- ・感染は幼穂形成期に起こるが、穂ばらみ期の降雨が多い場合に発生が助長される。
- ・本病菌の厚膜胞子は土壌中で数年生存するため、次年度の出穂前の天候次第で、再び多発する恐れはある。



### <防除対策>

- ・ 出穂前の予防が基本で、菌塊が見えてからの防除は効果が期待できない。
- ・ 薬 剤：モンガリット粒剤等
- ・ 散布適期：粒剤は出穂 21～14 日前。

### 3) トビイロウンカ

・ 梅雨の頃、偏西風に乗って中国大陸から飛来し、秋までに 3 回程度世代交代を繰り返す。水稻の株元で吸汁加害し、秋に急増すると稲が円形状に枯死する「坪枯れ」が発生する。葉の黄化や株元の黒いすすに注意し、早期発見に努める。本虫は越冬できないため、被害発生ほ場の稲わらの焼却は不要です。



### <防除対策 >

- ・ ウンカ類に対して苗箱施用（ツインターボフェルテラ箱粒剤など）と出穂前、出穂後の 3 回の期間防除を徹底する。

### 4) ジャンボタニシ

#### <生 態>

- ・ 用水路やほ場内で越冬した貝が、入水後にはほ場内で活動を始める。
- ・ 被害は田植え後約 20 日間に限られる。また、直径 1 cm 以内の幼貝は苗の茎を食害できない。

#### <防除対策>

- ・ 厳寒期（1～2 月）に水田を数回耕起し、寒さにさらしたり、貝を破壊したりすることで水田内で越冬する貝を減らす。耕うん時には走行速度を遅くし、ロータリーの回転数は早くする。浅く細かく耕すと貝が破壊される。
- ・ 水稻生育期は、用水路から侵入されないよう取水口と排水口に金網（2 cm 以下の細かい目）を設置したり、移植後 20 日間は浅水管理（水深 4 cm 以下）や薬剤散布で食害されにくいほ場にする。
- ・ 農薬で防除する場合  
スクミノン：1～4kg/10a（収穫 60 日前まで、2 回以内）  
スクミンベイト 3：2～4kg/10a（発生時、使用回数は制限なし）  
※ただし、「スクミノン」と「ジャンボたにしくん」は併用しない。また、散布後 7 日間は、落水や掛け流しはしない。